



TITLE:

蛇の星座

AUTHOR(S):

山本

CITATION:

山本. 蛇の星座. 天界 1941, 21(243): 343-347

ISSUE DATE:

1941-08-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/168244>

RIGHT:

蛇 の 星 座

この一文を今は亡き水野氏の靈にささぐ

(山 本 生)

(ことし巳の歳の初め、例によつて水野千里翁が干支に因んだ蛇の星座のことを書かれる筈であつた處、永い病床生活から、執筆の遅れんことを恐れ、自分に代筆を依頼されたのであつたが、あの元氣な翁が急に亡くなるとは、どうして思へず、其のうちに快癒して、また文壇に立たれることと念じてゐたのに、遂に不歸の客となられたので、止むを得ず、自分が茲に筆を取る次第である。)

蛇に因む星座は普通四つと思はれてゐる。「蛇座」と「ヒドラ座」と、「水蛇座」と、「龍座」とである。

へび座は、ギリシヤで作られた最初には、今の蛇遣ひ座と一つのものであつた。これは誠に尤もなことで、夏の天空に、大壁畫の如く現はれてゐる此の星座群を見上げると、「蛇」無しには、此の「蛇遣ひ」は、魂のぬけた骸骨のやうであるし、又、「蛇遣ひ」無しの「蛇」は、主なしの野放ちのあはれな一疋の小蛇に

過ぎない。どうしても、「蛇」^{へび}と「蛇遣ひ」^{へびつか}とは一つの星座^{せいざ}となつて、始めて其の偉觀^{ゐくわん}を發揮^{はつき}するのである。然るに、近代^{きんだい}の星學者^{せいがくしゃ}たちは、この星座^{せいざ}を「蛇首」^ゆと「蛇尾」^{だび}との二つにぶち切つて了つた。實^{じつ}に心なきわざである。しかし、ぶち切つたつもりなのは學者^{がくしゃ}の横暴^{わうぼう}であつて、天空^{てんくう}の「蛇」^{へび}は決してバラ／＼になつてゐない。やつぱり立派^{りっぱ}な一連^{れん}の星々^{ほし々}として、長い其の形^{かたち}を見せてゐる。西端^{せいたん}の力星^{せいせい}から東端^{とうたん}のテ星^{せいせい}に至るまで、多少^{たせう}の屈曲^{くつきよく}を表はしてゐる此の星座^{せいざ}は、ギリシヤ醫學^{いがく}の祖^そエスクラピウスの蛇^{へび}として、又はラオコーンを惱^{なや}ます蛇^{へび}として、永^{なが}い以前^{いぜん}からの傳説^{でんせつ}と共に、今も尙ほ人^{ひと}の眼^めを惹^ひく。夏の頭上^{なつづじやう}に君臨^{りん}する最も大きい星座^{せいざ}のうちの一つである。

「蛇首」^{だしゆ}を飾^{かざ}る星^{ほし}はア星^{せいせい}とベ星^{せいせい}で、共に三等^{さう}の輝^{かが}やきを有つてゐる。ア星^{せいせい}はアラビヤ語^{らびやご}でウルク・アル・ハヤ^{すなは}即ち蛇^{へび}の首^{くび}と呼ばれ、ラテン時代^{じだい}に入つてからは Cor Serpentis 即ち蛇^{すなは}の心臟^{しんざう}と呼ばれた星^{ほし}で、幾らかの黄色^{きいろ}を帶^おびた光^{ひかり}を有つてゐる。ベ星^{せいせい}はア星^{せいせい}の北八度^{きたはちど}ばかりの所^{ところ}にあつて、蛇^{へび}の頭部^{かうぶ}に輝^{かが}やき、九等級^{こくきふ}の

伴星を連れてゐる。

ヒドラは春の南天を飾る長大な星座である。小犬座の東から始まつて、天秤座の西隣に至るまで、東西百度に及び、其の北側には蟹、獅子、六分儀、コップ、鳥、乙女の諸星座を載せ、南側にはアルゴ船とセンチタウルとを壓へてゐる。この星座は三千餘年前からカルデヤ文化の榮えた時代に既に蛇形の天象として知られ、その宇宙創始の譚に歌はれるティヤマートの象徴と考へられ、エジプトでは又、之れがナイル河の形に擬せられ、中世に至つて、ユリウス・シラーは聖なるヨルダン河の象徴と見た。何れも皆、長大な形の暗示である。

ギリシヤではアラトスの詩や、エラトステネースの書物にヒドラと記され、只、ヒバルコスのみは之れを龍と記した。ラテン時代に入つて、ヒドラ(女性)とヒドルス(男性)とが交錯したが、後にも記す如く、バイエルが「水蛇」を南天に創設するに至つたので、此の星座は女性に一定して了つた。

星座の全形は無比の長さで、澤山の星を含んでゐる割合ひに、明るい星が少

く、只、最も光輝の強いのはア星、即ちアル・ファド、其の意味は「孤獨の星」である。ラテン時代には又、Cor Hydrae 即ちヒドラの心臓と呼ばれた。この星は支那では「朱鳥」と呼ばれ、堯典にある最も古い星の一つであつて、春分の夕刻に南中すると記されてゐる。星の色は赤く、近代のスペクトル型はKである。

この星座は全長が餘りに長いので、フラムステイドの時代には「ヒドラ」「ヒドラとコプ」「ヒドラと鳥」「ヒドラの連續」といふ風に、各部分が別々の星座のやうに取り扱はれた歴史もある。尤もな話であると言ひたい。

ヒドラは今日「海蛇」とか「水蛇」とか譯されてゐるけれど、元々之れはギリシャの神話に於いて、アルゴ船の遠征を誘つたヘスペリデスの園の主であつた神蛇のことであるのだから、餘り散文的な、又、單なる生物學的な名を附けないで、古典を其のまゝ、「ヒドラ」として置いた方が良からうと思ふ。

ヒドラとよく似た名で、三百年前にバイエルが創設したヒドルスといふ星座

が南天にある。エリダン河の南に續いてゐる位置で、フィリピンまで行けば冬の地平線に見えるものである。強いて直譯すれば、ヒドラは雌蛇であり、ヒドルスは雄蛇であるのだが、多少まぎらはしい。一方をヒドラのまゝにして置くならば、ヒドルスの方を水蛇と定めて置いても悪くはあるまい。ドイツの通俗界では「小水蛇」と呼んでゐるが、少し丁寧過ぎるやうである。——この星座中で、ベ星は三等級の黄星であつて、南極から十二度へだたつてゐるが、目標とするに足る星である。

東洋でも西洋でも、蛇と龍とは混同され易い。蛇の偉大なるものが龍であり、龍の小さいのが蛇だと言つても、世間には一應通用する。星座に於いても、北極のまはりの龍星座は、まのまゝの形で、昔からよく蛇と呼ばれることがある。勿論、之れも神話的の星象であつて、殊にかのヘスペリデスの園を守つた蛇は、この北極龍のことだと定めてゐる人が多い。蛇は知識の象徴として、昔から人に畏敬されてゐるのだから、人類全般への印象は深いものである。